

俺はシッセイ、お前はカンセイ



## What's in a name?

さくらぎ まり子 桜木 真理子

大阪大学大学院博士後期課程

ハンセン病がかつて「らい病」とよばれていたことを知る人は少なくないが、ハンセン病患者たちが自分たちの体にまつわる多種多様なことばを共有していたことは知っているだろうか。群馬県のハンセン病療養所で在園者の人びとへの聞き取りを始めた当初、わたしは病気の経験や後遺症にまつわる彼らの語りにはしばしば登場する耳慣れないことばに戸惑うことがあった。

例えば、ハンセン病による神経障害で皮膚の感覚が鈍くなった部分は「ワスレメ」とよばれる。また、在園者同士の世間話にはよく「キズ」とか「万年キズ」ということばが出てくるが、これは一般的なすり傷とは異なり、一度できた傷が重症化してしまつた潰瘍を意味している。

特に興味を惹かれたのは病気のタイプ（病型）をあらわすことばだった。「病気にはシッセイとカンセイがあつて、シッセイが自分のタイプ。シッセイは眉毛が落ちる。カンセイは眉毛がピンとしていゝ。手足が曲がればカンセイ、眉毛が抜ければシッセイ」。二十代から現在までずっとこの療養所に住む九十代の男性はこう教えてくれた。聞けば、戦前から戦中期に療養所へ入所した彼らは、先輩患者からこれらのことばを教わつたのだという。当時の療養所の医師は、患者に対して直接病型を告知しなかつた。その代わりに先輩患者たちが、新入

りの経過を観察し、「お前はカンセイだな」などと、先輩患者を独自に「診断」していたのだ。彼らは先輩患者から口頭で教わつたことばをいつの間にか覚え、身に付けていった。

一九世紀末から一九五〇年代まで、医学的には臨床症状の特徴をもとにした「神経癩」、「斑紋癩」、「結節癩」が病型分類として一般的で、当時各療養所が発行していた統計年報にもこれらが記載されている。その一方で、一九〇〇年代前半の古い医学書を紐解くと、病型のよび名には他にも「いばらい」や「うすどく」、「たむしらい」といった多様な俗名があつたことが窺い知れる。そうした俗名のなかに「乾性」と「湿性」も含まれていた。ハンセン病医学の専門誌『レブラ』に掲載された一九四四年の論文では、医学的な病型分類と対比して、「脚気の浮腫性」のものが湿性で手足の『シビレ』の甚しきものは乾性と呼ばれて居る」と述べられている。ひとつ療養所のなか、医師と患者それぞれの病型のよび名が併存していた事実は注目に値する。

ハンセン病療養所のように、同病者と数十年間ともに過ごす環境はめずらしいとはいえ、病院や患者グループのなかでも同様に独自のことが使われることがある。同じ病気をもつ人びとのあいだには、感覚や身体的不調を共有するための豊かなことばの世界が広がっている。